



TITLE:

<批評・紹介> 鴛淵一著「満州史」
(世界歴史大系第十一巻所収)

AUTHOR(S):

山本, 守

CITATION:

山本, 守. <批評・紹介> 鴛淵一著「満州史」(世界歴史大系第十一巻所収). 東洋史研究 1935, 1(1): 69-73

ISSUE DATE:

1935-10-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138661>

RIGHT:

鴛淵 一著

「滿洲史」

— 世界歴史大系第十一卷所収 —

世界歴史大系滿鮮史篇は從來の一個人の手になる滿洲史とは異なり、矢野博士鴛淵文理大助教授以下斯界の專家が、その蘊蓄を傾けて各自の専門的見地から立論せられたもので、此點本書の特長とする所である。

今本書を紹介するに當つて、特に清朝初期を選んだのは比較的こゝに關心を有する事と、著者から別刷の贈與を受けるの光榮に浴した爲である。以下二三の問題に就いて卑見を述べよう。

1 大清の稱號。同書四九五頁に

大清の名義に就いては諸説あり、何れとも定め難いが小旻金天氏の父を清と云ふ説に本いたと言ふ、稻葉博士の説は必ずしも排斥されぬと考へる。

と述べて、博士の説を支持して居られる様であるが、僅に「小旻金天氏の父を清と云ふ」だけでは簡略に過

きて、その意の判然しない憾がありはしまいか。本書の性質上詳述する事が許されないならば、せめて原著を指示されることによつて讀者の便は遙に大なるものがあつたであらう。

この國號問題に關しては著者も云はれる通り諸説あるが、その中に金、清二音の相似を説くものがある。元來この説は金は *chin* であり清は *ching* で、この *n* 音と *ng* 音が混淆せられる事は絶対に無いとの理由で非難されて來た様である。然し私はこの機會に於て、この兩音の絶対に混淆し得ないものではない事を例證して置かう。

例へば

1 蒙古源流滿文本(北平故宫鈔本)卷八

錦州の錦の音を *ging* と寫す

2 貝勒尙善の吳三桂に與ふる書(奉寬氏所藏滿文鈔本)に親王の親を *ying* と寫す

以上は單に *n* 音が *ng* 音に用ひられた例に過ぎないが、偶々李德啓氏より贈られたる氏の近業、「阿濟格略明事件滿文本牌」を見るに、同牌中には *ng* 音で寫さるべき支那音の字が、滿文では *n* 字で寫されて居る。例へ

ば

1 副將參將の將の音を *jan* で寫す

2 良鄉縣の良の音を *liyan* で寫す

等即ちこれである。成程支那人が支那語に於いて、又滿洲人が滿洲語に於いて、*n* 音と *ng* 音とを混淆する事は有るまい。然し支那語が滿洲語として取入れられる時、或は滿洲人によつて發音せられる時に於いて混淆を見た事はこの例でも明であらう。だからと云つて金と相似の音は清一つに限らず、何故に清の字を選んだかと云ふ問題も残されるであらう。然しそれも相似音中で、その字の持つ意義、それに對應する滿洲語等を考慮して決定したものではあるまいか。「清」(或は「明」)の字に對應する滿洲語は *Gengiyen* である。太宗の廟號を「*Taižung gengiyen šu hūwangdi*」と言ひ、或は *Gengiyen ejen*「明君」等何れも至極結構な意味に使用せられる字である。

2 滿洲の稱號。本書四百九十五頁に

太宗は此の時滿洲と云ふ名が古くから有つた如く偽作して云々

と記され、矢野博士は五〇二頁に

滿洲と云ふ名稱がこの時に於いて俄に案出されたものであるとは考へる事は出来ない

と全く相反した論を爲して居られる。この問題に關して今西學士が(史林二〇卷三號)論述せられた所は新老檔を信用する限りに於いて尤と首肯さる。只學士も懸念される如く、この老檔が乾隆の重鈔に當つて改められた點ありとするならば問題は自ら別である。私は先に無圈點老檔の譯述に當つて居た奉寬氏に老、老檔に滿洲なる文字の有無を問合はせた所、同氏より左の返書に接した。

〔前略〕 檢査無圈點老檔太祖天命太宗天聰時並無滿洲國號惟自稱 *aisin gurun* 人稱 *Kiyangju ni* (建州衛) 及 *jusen* (珠申) 崇德以後方追稱 *manju* (下略)

と。果して斯の如しとすれば太宗の僞作説が正しいらしく考へられるが、然らば何故乾隆重鈔の時に、或る一部のみ滿洲と改め、他を元の儘に残したか、新老檔に滿洲とある部分は果して如何なる文字を使用してあるか等、尙遽に決定致し難い問題である。

次に滿洲の名稱の起源に關して、著者の言はれる如く、

く、滿洲族が文珠の信仰あるによつて、この名を得たものであらうか。太祖以前の滿洲部族の間に文珠の信仰等あつたかどうか疑はしい。太祖が「滿住」を稱したのは兎に角、李滿住の名も文珠の信仰に基いたものであらうか。元來彼等の信仰は Shamanism であつた。太祖が遠大の理想の下に經營に當るに至つて、對外的な面目から、初めて高級なる宗教が取り入れられたのではあるまいか。一步譲つて「滿住」の名が文珠に基づくものだとしても、決して信仰あつた爲とは限るまい。同じく東北の地に榮えた遼金の時代には、佛教の信仰も盛であり、菩薩奴、觀音奴、藥師奴等佛名に關係ある人名も遼金史に散見する。遼の聖宗は小字を文珠奴と云つた。然し何れも「奴」の字を伴ふ例とする。かく遠き昔から——信仰とは全然無關係に——かかる名稱が、單に人名として後世にまで繼承されて、明代女直に至つたとも考へられる。若し文珠の信仰が盛であつたならば、文珠信仰を思はせる何物かゝ存すべきである。清文鑑の中にも Shamanism に關する記載が非常に多いにも拘らず、文珠師利の名さへ見えないのも、この事實を裏書するものではあるまいか。

然らば文珠と離れて滿洲を如何に解するか。manjuなる蒙古語には、所謂滿洲の意味の他に、大槌、杆或は棍棒の意味の存する事が、Schmidtの蒙古語辭典に見えて居る。早期滿洲語（舊滿語と稱するもの）に蒙古語が多く介在し、人名等に物の名を用ひた例に乏しくない事は周知の通りである。「大槌」等の意あるmanjuが有力者の名となり、或は部族名に附せられるに至つたとしても怪しむに足りぬ。

元來文珠師利とは別個のmanjuなる名稱の存する所へ、偶々西藏から來た國書に、文珠師利皇帝と書いてあつた事と關聯して、文珠と結び附けられたものと考へられる。西藏の國書に、文珠師利皇帝とあつたと云ふが、長尾學士の教示によれば西藏語では梵語を意譯したもの多しと云ふ。問題の文珠も、hiam dipalと云つて、manjusriとは言はない様である。自國に通常使用しない文珠師利なる言葉を使つたと言ふ事は、東方に滿洲を名のる君主ある事を聞知して、殊更に梵語の文珠師利なる語を使つたものと考へねばならぬ。

Ⅲ 滿洲文字。

イ 滿洲文字制作の條下に、「尙此文字は無圈點檔

子で」と書かれ檔子に殊更文字なる註を附せられたのは如何なる意味であらう。滿洲文字の事を特に檔子と呼ぶと言はれるのであらうか。然し滿洲語でも檔子は“dangse”であり、文字はhergenと云ふ。決して同一では無い。若し同一とすれば、有名なる有(無)圈點老檔と呼ぶ。

Tongki fuka sirdaha (akū) hergen i dangse
語 圖 國キタルナキ 文字ノ檔子

は意味をなさぬ事となる。

ロ Burhan。第一篇肅慎の條に

Burhanを蒙古語「神」の意とせられるが、今日ではこの語は「佛」の意味であつて「神」ではない。従つてBurhanに對應する滿洲語は、Fuciniであつて、Enduriではない。蒙古語Hubilganに對應する滿洲語こそ、即ちこのEnduriであらう。蒙古の歴史に見ゆる不見罕も、那珂博士こそ「神」嶽と譯して居るが元朝秘史明譯にも、「神」の意に譯されたわけでも無し又蒙兀兒史記の屠寄等は「佛」と註して居る。強いて神と譯すべき理由は思出せない様に思はれるが如何だらう。

ハ 可汗。「太宗も初め九年間は可汗と言つたので」とあるが清朝では「汗」とは稱するが可汗と稱した例は無い様に思はれる。滿洲語では Han (汗) とのみ稱して蒙古語の如く "Hagan" なる形はなかつた。従つて可汗と云ふ稱號は無かつた様である。

以上思ひ附くまゝに書き記して紹介に代へんとする

ものであるが、最後にかゝる僅かな紙數の中に複雑なる明代女直の狀態から清初の形勢を巧みに纏められたこの一書は確に後學の爲に便する事蓋大であらう。妄言多謝。

(昭和十年七月平凡社刊)

(山 本 守)